

初代教会で執事として選ばれたステファノは恵みと力に満ち、すばらしい不思議なわざとするしを民衆の間で行っていました。ところが、ステファノと議論してもまったく歯が立たなかった人々が、ステファノを陥れようとして、長老たち、律法学者たちを扇動してステファノを襲って捕らえ、最高法院に引き出し、そこで尋問します。それに対してステファノが行った説教が、使徒言行録7章2節から53節にまで及ぶ説教です。

ステファノはここで、イスラエルの先祖であり、神様から最初に選ばれたアブラハムから始まったイスラエル民族の歴史を紐解きます。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、そして神様がモーセを遣わしてくださり、エジプトで奴隷になっていたイスラエル民族を解放してくださったこと。そして、ヨシュア、ダビデ、ソロモンまでのイスラエル民族の歴史を語ります。そして、そのイスラエルの歴史の中で、いかにイスラエル民族が神様に逆らってきたか、預言者を迫害し、正しい人々を殺してきたかを告白します。そしてそれは、過去にイスラエル民族が犯してきた過ちだけではなく、今も同じ罪を犯し続けていること、神様に対して逆らい、かつての預言者たちが預言した来たるべき正しい方、イエス・キリストをも殺してしまったことを語るのです。

ステファノの説教は、しかし、ステファノを捕らえ、最高法院に引き出した人たちの前で語るのには、あまりにも危険でした。それは、長老たち、律法学者たちに対して、面と向かって、イエス・キリストを殺したあなたがたは神に逆らう者たちであると言っているからです。案の定、ステファノは58節にありますように、都の外に引きずり出されて、石を投げつけられ、殺されてしまいます。

ステファノは、最高法院で引き出されたときに、こんな話をすればどうなるかくらい、分かっていたはずですが。そしてその結果、たいへん残念なことに、ステファノが予想したとおりになってしまう、ステファノは命を失ってしまいました。

ステファノは、命を失うことになることがわかっているながらも、なぜ、あのような説教をしたのでしょうか。ステファノはここで、ある一つの決断をしたのです。

決断とは、決めて断つことです。たとえば私たちが道を進んでいるとき、右に行くか左に行くかを決断をしなければならぬとき、右と左、両方に行くことはできませんから、右か左、どちらかに決める。一方に決めるといことは、もう一方をあきらめること、断つことです。決断という字は、決めて断つと漢字で書きます。何かを切る、何かをあきらめる、何かを断つことで、本当の決断ができるのです。けれども、私たちはなかなかこの決断ができません。完全にあきらめたり、断ったりすることができない。さまざまなものに未練が残る。あきらめきれない。とりわけ、時間やお金をかけて入念に準備して手に入れたものを断つことには、とても大きな抵抗を感じます。しかしそのように一方を断つ決断ができなければ、実はもう一方も手に入れることができない。二兎を追うものは一兎も得ることができないのです。

ステファノは、最高法院に引き出されたときにある決断をしました。一つのことを決めて、他のことをあきらめる決断でした。ここで一つ注意をしておきたいのですが、ステファノは、生きることをあきらめたわけではありません。どうしようもない状況で、どうせ助からないのならと自暴自棄になって自分の命を捨てた、というのではありませんでした。ステファノは、ただイエス・キリストだけに従うという決断をしたのです。ですからス

テファノは、イスラエルの先祖からの歴史を紐解いて、イスラエル民族がいかに神様に従わなかったかという罪を暴き出し、それと同じ罪が今のこの時代にもある、その同じ罪によってイエス・キリストは十字架で殺されてしまったのだと、今のイスラエル民族の罪をも暴き出したのです。けれどもステファノは、ここで自分自身を例外に置くことはしませんでした。あなたがたは罪人だけれども自分は違う、とは言わなかったのです。ステファノは目の前にいる人々に対して、イスラエル民族が今も神様に対して逆らって立ち、罪を犯し続けていることを示しましたが、同時に自分にも同じ罪があることを認めていたのでしょう。今日の聖書の箇所、7章59節と60節にはこう記されています。『人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ』。

ステファノは、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と叫びます。ステファノは彼の説教の中で、イスラエル民族がいかに神様に逆らって生きてきたかという罪を暴きました。そしてそれこそが、イエス・キリストを十字架の死に追いやったのだと語ります。しかしステファノは、自分も同じイスラエル民族の一人である、自分もまた同じ罪の中にあり、自分もまたイエス・キリストを十字架につけた罪人の一人なのだということを認めていたのです。ですからステファノは、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と叫んだのです。

このときのステファノの気持ちは、イエス様と一緒に十字架につけられたあの犯罪人の一人と同じような思いだったのではないのでしょうか。ルカによる福音書の23章40節からの箇所には、イエス様をののしった犯罪人の一人をたしなめて、もう一方の犯罪人が語った言葉が記されています。新約聖書の158ページ、下の段のいちばん最後の行になります。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない」。ここでイエス様と一緒に十字架につけられていた左の犯罪人は、自分たちは十字架刑につけられるほどの悪事を行ってきたからこの刑罰を受けるのは当然だけれども、自分の隣に十字架と一緒につけられているイエス様は何の罪も犯していないのに、我々と同じ十字架刑に処せられていると考えていたのです。それと同じように、ステファノもこう考えていたのでしょう。自分もこの最高法院にいるイスラエルの人々と同じイスラエル民族であり、神様を裏切ってきた人間なんだ。自分も同じ罪人である。その罪人である私は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然である。しかし、イエス・キリストは何も悪いことをしてはいないのに、十字架に掛けられ、殺されてしまった。ステファノはそのことを覚え、イエス・キリストを十字架にかけてしまったことを自分の問題として悔い改めます。ステファノ自身がもう一度、神様に立ち返らされたのです。そこでステファノは、十字架上のあの犯罪人と同じ思いに至ったのでしょう。「イエスよ、あなたの御国においてになるときには、わたしを思い出してください」。ステファノは、この世の命が消え失せるその間に、十字架のイエス・キリストが共にいてくださることを知っていたのです。

こうしてステファノは、ただイエス・キリストだけに従うことを決断しました。けれどもステファノは、最高法院に引き出され、絶体絶命の状況の中で、生きることをあきらめたわけではありませんでした。そうではなく、ステファノは、最高法院に引きずり出された後も、たとえどのような状況になっても、イエス・キリストに従うことを決断し、それ

以外の道をあきらめました。イエス・キリストに従うこと以外のあらゆる道を断ったのです。ステファノはあらゆる退路を断ち切りました。自分がどうにかしてこの場から逃れる道や、なんとか言い訳をして安全を手に入れるすべての道を断ち切ったのです。そのように決断して語ったのが、あの説教でした。ステファノが語った説教は、今ステファノの目の前にいる人々、イスラエルのすべての人々の罪を暴いただけではなく、ステファノ自身の罪をも暴くものでした。自分自身もイスラエルの人々と何ら変わりのない罪人であることを認めたのです。だからステファノは、主イエスに従うこと以外に道がないことを認めざるをえませんでした。けれども、ステファノの周りにいた人たちは、自分たちの罪を認めることができませんでした。自分たちの先祖が神様に逆らった罪も、そして自分たちも神様に逆らって立つ罪人であることも認めることができませんでした。ですから、イエス・キリストを十字架につけた罪も、認められませんでした。彼らは自分自身の罪を認めることができなかつたので、その罪から解放される道、すなわち、主イエスに従う道を選ぶこともできなかつたのです。自分の罪を認めることができない者は、自分に罪があるとは思っていないために、その罪から救われることもできないのです。

ステファノはこのようにして、重大な決断をします。彼はただイエス・キリストだけに従う道を選び、他の一切の道を断つ、断念する決断をしたのです。そのためにステファノは自分の命を失います。しかし、ステファノは、それ以上のものを得ることができました。イエス様はこう言われました。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである」。ステファノは、まさにこの言葉を実行したのです。

さてここで少し横道にそれて、一つ大事な話をしておきたいと思います。ステファノの殉教の話が聖書に記されているのは、私たちも同じように自分の命を懸けて決断していくようにとの勧めではないということをお話しておかなければなりません。神様は私たちに「生きよ」と命じてくださいます。自分の命も他の人の命も、どちらも大切な命として生きていくために、私たちはこの世に生を受けたのです。ステファノは、イエス・キリストだけに従っていく決断をし、その結果、この世での命を失いましたが、イエス様は同じように私たちに殉教することを勧めているのでは決してありません。むしろその逆で、命を大切にしなさいとイエス様はおっしゃっておられるのではないのでしょうか。なぜ、そんなことが言えるのでしょうか。それは、イエス・キリストの十字架の贖いは、すべての人のためであったからです。イエス・キリストの十字架の贖いは、信じている者のためだけではなく、信じない者のためにも、すべての人の贖いとしてイエス様の十字架はあったのです。だれか他の人の罪の代わりとしての贖いの死は、イエス様の十字架以外では決してありえません。ですから、他の誰も殉教してはならないし、他の誰一人として殉教しないためにこそ、イエス様の十字架の死があったのです。ただ残念なことに、ステファノ以降、キリスト教を信じた人々は本当に多くの殉教者を出しましたが、本来なら、誰一人として殉教しなくてもよいように、イエス・キリストの十字架があった。いやむしろ、誰一人として殉教することがないように、イエス様は十字架にかかられたのだと、私は思うのです。

殉教の話ではありませんが、あるお話をご紹介します。みなさんは踏み絵をご存じでしょうか。昔、日本でキリシタン禁止令が出て、クリスチャンが弾圧された際に、クリスチャンに信仰を棄てるようにと棄教を迫った際に、イエス様の顔を描いた絵を踏ませた「踏み絵」が行われました。踏み絵を踏むと、転んだと称され、キリスト教の信仰を

棄てたものと見なされました。私などは、イエス様の顔を描いた絵など偶像に過ぎないと思っていますから、さっさと絵を踏んで生き延びて、信仰を棄てずに生きていったらよいと思うのですが、踏み絵を踏まずにクリスチャンとしての証を立てて、命を落とした人や投獄された人たちもたくさんいました。これは福岡にいたころ聞いた話ですが、ある信仰者が踏み絵を踏まずに投獄されたのですが、彼が獄中にいるときに食事を運んでその人の命を助けたのは、踏み絵を踏んで転んだクリスチャンだったそうです。私はこの話を聞いたとき、こう思いました。踏み絵を踏まないで転ばずに投獄された人はとても立派な信仰者だった。そして、踏み絵を踏んで転んだことによって投獄を免れ、けれども投獄された人を助けた人もとても立派な信仰者だった。どちらも、その信仰の表し方は違っていたけれども、どちらの人もとても素晴らしい信仰者だった、と私は思うのです。同じように、ステファノは殉教することによってイエス・キリストへの信仰を表したけれども、殉教せずに生き延びてイエス・キリストへの信仰を表し続ける人も立派なクリスチャンなのです。そして神様は、殉教など決して勧めておられるのではなく、むしろ命の大切さを願っておられる。イエス・キリストの十字架以外は、誰一人として殉教などしないで済む世界を築き上げることを望んでおられるのだと、私は思うのです。

さて、話が少し横道にそれましたが、今日の聖書の箇所に戻りますと、ステファノがこうしてイエス・キリストに従う決断をして、その命を失った後に、たいへんな出来事が起こります。今日の聖書の箇所、使徒言行録8章1節の後半から、こんなふうに記されています。「その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った。しかし、信仰深い人々がステファノを葬り、彼のことを思って大変悲しんだ。一方、サウロは家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わず引き出して牢に送っていた」。

ステファノの殉教をきっかけに、クリスチャンの大迫害が起こります。サウロという人物が、クリスチャンを捕まえては牢に送り込み、人々は地方へと逃げ、ちりぢりバラバラになっていきました。キリスト教は危機を迎え、まさに風前の灯のようでした。ところがこの後、私たち人間の常識では考えられないようなことが起こります。それはまるで、イエス様の十字架の死ですべてが終わったように思われたあの出来事後、イエス・キリストが復活され、大逆転が起こったような出来事でした。この話の続きは、来週のイースターが終わった後、2週間後の礼拝で共に聖書から聴きたいと思います。

お祈りしましょう。